

サティ & マルタンの『スポーツと気晴らし』

図書館長・教授（西洋服装史担当）石山 彰

エリック・サティをご存知だろうか。いわゆるアール・デコ期を代表する現代音楽家と目されている人物であり、日本ではすでに大正末から昭和初期（1920年代半ば）にかけて異色の作曲家として坂口安吾、小松耕輔、小泉浴らによって、また近くは山口昌男らによっても紹介ずみの人物であるが、一般に知られるようになるのはごく最近のことで、ここ4・5年のことである。¹⁾そしてこのところまさにエリック・サティ・ブームを現出しているというのが実情なのである。

サティは1866年5月17日フランスのノルマンディ地方に生れ、1925年に59歳でパリに没した。なぜ今になってサティがこれほどもてはやされるのであろうか。彼は現代音楽に多大な影響を与えたフランス印象派音楽の大家ドビュシー（1862-1918）らとともに現代音楽を先取りしているばかりでなく、小節をとり去った気持ちよい音楽つまり「家具の音楽」を提唱したことでユニークである。また20歳代の除隊後はパリ音楽院には復帰せず、モンマルトルの文学酒場『シャ・ノワール（黒猫）』に入りびたってピアニストのアルパイトをし、そこでコクトーやピカソらと知り合い、やがて独自のシニカルな音楽を作曲することになる。

本書は彼の作品を代表するものの一つであり、「スポーツと嬉遊曲」とも訳される。原題は次のとおりである。(K383.135-M)Musique d'Erik Satie & dessins de Ch. Martin, Sports & divertissements, pub. Lucien Vogel, Paris, 1914.

発行者リュシアン・ヴォーリエルといえば、アール・デコ期のみならずファッション・ブックの王様とされる有名な『ガゼット・デュ・ボントン』

誌の編集長であり、ボントン以後は『ジャルダン・デ・モード』を編集したことでも知られている。シャルル・マルタン（1884—説には1888—1934）は当時すでに『ガゼット・デュ・ボントン』誌にイラストを描き、評判が高かった。ヴォーリエルははじめマルタンに本書の挿絵を描かせたのち、これにもとづく作曲をストラヴィンスキーに依頼したが、作曲料の条件で折り合わず、やがてそのお鉢がサティに回ってきた。1914年のことである。サティはヴォーリエルの委嘱料は、それでもまだ高価にすぎるといってさらに安価に値引きして引き受けたのだった。絵と詩と曲の構成は「ブランコ」から「テニス」までのそれぞれ20に及ぶ短篇の詩と曲とやや横長（39.5cm×43.5cm）のポショワール版面からなっており、225部刊行された。序に続く〈食欲をそそらぬコラール（聖歌）〉という曲を加えれば21曲からなるサティ自筆の詩と譜が刷られている。これらの短い嬉遊曲は現代フランス音楽の中でももっとも注目すべき作品とされているのである。

〈食欲をそそらぬコラール〉という見出しつき



図は③のイタリア喜劇

の序文にはこう記されている。「本冊は描画と音楽という芸術の二要素からなっている。描画は描線による形——それは心の線で、音の部分は点——つまり黒点で表わされている。両者が一体となつて一冊のアルバムを形成している。(中略)無趣味な人びとや愚かしい人びとのために私はまじめで礼儀正しく聖歌を書いた。この聖歌は一種の苦しい序言であり、厳しくしかも不真面目さ抜きで導入法から入った。私が知っている“退屈”のあらゆることを入れたのである。私は、私を好まぬ人びとにこの聖歌を捧げる……。」と。

以下、藤富保男訳の『エリック・サティ詩集』および秋山邦晴著『エリック・サティ覚え書』の両者を参照しながら、スペースの関係で11曲の訳詩を掲げることにして。①ブランコ このように揺れているのは私の心／でも目まいなどはしない／なんと可愛い脚だこと／私の胸の中に戻りたいのかな ②狩り 兎が歌っているのが聞こえる？／何という声だろう／鶯は巢の中に／みみずくは子供におちちを飲ませてる／いのししの子は結婚ま近か／だが私は鉄砲打ってくるみを打ち落とす ③イタリア喜劇 道化役のスカラムーシュは軍隊の美点を説く／軍人になればひどいはずら者にもなれると彼はいう／市民を怖がらせることも／それに恋の冒険も／他にもさまざま、と彼はいう／何と素敵な職業！ ④花嫁の目覚め 行列が来た／呼び声／起きてちょうだい／古帽子でできたギター／犬もフィアンセと踊ってる ⑤目かくし鬼 鬼さんこちら／手のなる方に／好きな人はすぐそばよ／青ざめた顔で唇はふるえて／笑ってるの、あなたは／彼は両手を胸に当てて…／でも、そなたは知らずじまいに通りすぎる ⑥魚釣り 川の底の水のざわめき／一匹の魚がくる／また一匹、そしてまた二匹／何してんの／釣り人がいるの、ひとりのあわれな釣り人が／そう、ありがと／そういつて魚は皆家へ帰っていく／釣り人も帰っていく／川の底の水のざわめき ⑦ヨット遊び 何という荒天／風がアザラシのように吠える／ヨットは踊る／狂った子のように海は荒れ狂う／岩に当ってヨットが壊れなければいいが…

／だが海には誰も逆らえぬ／こんなところに私いたくないわ／と乗ってる可愛い人がいう／ヨットはちつとも愉しくないわ、私別のことがいい／車呼んできて ⑧海水浴 奥さん、海は広いですよ、それにとても深い／水底に座り込んでいけません／ひどく湿ってるから／たけた波が次々にやってくる／満潮だ／ずぶぬれでしょう、奥さん／ええ、そうよ ⑨カーニバル 紙吹雪が舞う／憂うつな仮面がいる／酔ったピエロがからんでいる／黒ベールをつけた婦人が、しなやかな身ごなしでやってくる／それをみようとする人びとは押し合いへし合いだ／彼の女たち果して美人かな ⑩ゴルフ 連隊長は濃緑のスコッチ・ツイードを着、勝ちそうにみえる／キャディはバッグを担って従う／雲はおどろき、ホールがみんな震えている／連隊長がやってきた／ごらん／ショットを決めようとしている／おや、彼のクラブが砕けてとんでいく ⑪蛸 蛸は穴の中／蟹をからかっている／蟹を追いまわす／蟹を斜めに呑み込む／物すごい目つき／自分の足を踏みつけて進む／体調をもどそうと水を一杯／この一杯はとても具合がよく、考えも変るといもの

最後にシャルル・マルタンに触れておこう。イラストレーターであるとともにインテリア、ファッション、舞台装置・衣裳のデザイナー。モンテリイ工美術学校とアカデミー・ジュリアンに学んだのち、パリ美術学校でコルモンのアトリエに参加。ル・リール、モンド・エ・マニエル、ドージュルジュイ、ガゼット・デュ・ボンソンその他多くのモード誌にユニークなイラストを描いた。

注) 1974年5月の『ユリイカ』の特集号「エリック・サティの奇妙な世界」；1984年、マルク・フルデル著、高橋悠治・岩崎力訳の『エリック・サティ』（リプロポート）；1985年アンヌ・レエ著、村松潔訳、「エリック・サティ」（白水社）；1986年、高橋アキ校訂、秋山邦晴監修「スポーツと気晴らし」（全音楽譜出版）；1989年、藤富保男訳『エリック・サティ詩集』（思潮社）；1990年2月の『現代詩手帖』の特集号「エリック・サティ含羞と逆説」；秋山邦晴著『エリック・サティ覚え書』（青土社）；1990年7月、ジャン・コクトー著、坂口安吾・佐藤明訳『エリック・サティ』（東京音楽社）；1990年12月、新井満著『サティ紀行』（主婦の友社）など。